鳥取市文化財報告書21

広岡古墳群発掘調査報告書 Ⅱ

1987

鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

鳥取市文化財報告書21 広岡古墳群発掘調査報告書 Ⅱ 一九八七 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団

鳥取市文化財報告書２１

『広岡古墳群発掘調査報告書Ⅱ』正誤表

頁	行	誤	正
2	7	水洗調査の	水洗精査の
15	6	墳丘東は、	墳丘東側は、
18	25～26	盛土、上から	盛土上から
18	27	一部に細い	一部に細かい

★お手数ですが訂正をお願いします。

序

鳥取市は、大砂丘と鳥取城跡に象徴されるように、自然と歴史に恵まれた山陰の中核都市として発展いたしております。古代から政治・文化・経済の中心地として栄えた鳥取市には、多くの文化遺産を今に伝えており市民の誇りとなっております。このため、鳥取市教育委員会といたしましても、文化財の重要性を十分に認識し、その保護・保存に努力しているところであります。

ここに報告する広岡古墳群の発掘調査は、広域農道整備事業に伴い実施したものですが、鳥取の古代史を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。調査の記録としては満足すべきものではありませんが、少しでも市民・関係者各位に活用され、文化財保護理解の礎となればと念じております。

発掘調査に際しましては、事業者ならびに関係各機関のご理解とご協力をいただきました。最後になりましたが、心より感謝申し上げる次第であります。

昭和62年3月

鳥取市教育委員会

教育長　田村一三

例　言

1．本書は、鳥取市広岡字差美谷に所在した広岡49号墳（238番地）、広岡50号墳（237番地）の発掘調査報告書である。

2．この調査は、県営鳥取地区広域農道整備事業（広岡ルート）に伴う事前発掘調査として、昭和61年6月2日から昭和62年3月10日まで鳥取市教育委員会の指導・監督のもと鳥取市遺跡調査団が実施した。

3．本書に用いた方位は、第1・2図を除き磁北を示し、レベルは海抜標高である。

4．本書に掲載した実測図、図版写真は、調査参加者全員の協力によって作製したものである。

5．本書の執筆編集は、調査参加者はじめ、多くの方々の指導と協力を得て岩垣伸治、船井武彦、平川誠があたった。また、広岡49号墳出土の石棺材については、山名巌先生（鳥取県教育研修センター）から御教示を受けた。

6．本発掘調査によって作製された記録類及び出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。

7．調査関係者は以下のとおりである。

発掘調査指導監督　鳥取市教育委員会教育長　田村　一三

鳥取市遺跡調査団	団長	田村　一三（鳥取市教育委員会教育長）
	理事	古田　幹男（　〃　委員）
		治部田史郎（鳥取市面影小学校教諭）
		平勢　隆郎（鳥取大学教育学部講師）
		坂根　政春（鳥取市教育委員会次長）
	監事	近藤　忠成（鳥取市文化ホール館長）
		中尾　恭治（鳥取市教育委員会庶務課長補佐）
	事務局長	谷本　勝実（　〃　社会教育課長）
	会計幹事	門脇　隆雄（　〃　社会教育課長補佐）
	会計	小杉　宗雄（　〃　文化係長）
	庶務幹事	平川　誠（　〃　主任）
	庶務	西村　朋之（　〃　主事）
		中島伸一郎（　〃　）
	調査員	前田　均
		船井　武彦
	調査補助員	杉谷美恵子、奥田繁太郎、岩垣伸治、谷口忠章、安富　尚
	事務補助員	安木とし子
	作業協力	武田勝義、福田孝子、福田藤蔵、福田三男、松田君子、浜中健治、森本豊実、古田しか子、松本一枝、丹波千恵野、松田道雄、松本徳子、西村　昇、松本日出子、須崎　正、平林包雄、奥田ヤス子、治部田祐輔、伊藤マスコ、浜野るみ子

目　次

序文
例言
第１章　調査経過……1
　第１節　発掘調査に至る経過……1
　第２節　発掘調査の経過……1
第２章　歴史的環境……2
　第１節　遺跡の位置と歴史的環境……2
　第２節　広岡古墳群……4
第３章　調査の概要……8
　第１節　広岡49号墳……8
　　１．位置と現状……8
　　２．墳丘の構造……10
　　３．埋葬施設……13
　　４．出土遺物……14
　第２節　広岡50号墳……15
　　１．位置と現状……15
　　２．墳丘の構造……16
　　３．埋葬施設……17
第４章　まとめにかえて……18

図版目次

図版１　１．調査地遠景（東から）　２．調査地遠景（北から）　３．調査前の広岡49号墳（南西から）４．同　墳丘（南西から）
図版２　１．広岡49号墳箱式石棺検出状況（南西から）　２．同　蓋石合せ目検出状況（北東から）３．同　蓋石、敷石除去後の箱式石棺（北東から）　４．同　調査後の墳丘（南西から）
図版３　１．広岡49号墳箱式石棺検出状況（北西から）　２．同　蓋石除去後の箱式石棺（北西から）３．同　蓋石、敷石除去後の箱式石棺（北西から）　４．同　墓壙（北西から）
図版４　１．調査前の広岡50号墳（北から）　２．同　周溝の堆積状態（南北から）
　３．同　調査後の墳丘（東から）　４．同　調査後の墳丘（北から）

図版２　１．広岡50号墳主体部石材残存状況（西から）　２．同　墓壙（東から）
３．同　墓壙（北から）　４．広岡49号墳出土管玉

挿図目次

第１図　鳥取市東南部遺跡分布図……3
第２図　広岡古墳群周辺遺跡分布図……5
第３図　発掘調査古墳位置図……9
第４図　広岡49号墳地形実測図……10
第５図　広岡49号墳墳丘遺存図……11
第６図　広岡49号墳主体部実測図……12
第７図　広岡49号墳主体部箱式石棺実測図……折り込み（１）
第８図　広岡49号墳主体部墓壙実測図……13
第９図　広岡49号墳出土管玉実測図……14
第10図　広岡50号墳地形実測図……15
第11図　広岡50号墳墳丘遺存図……16
第12図　広岡50号墳主体部実測図……17

表 目 次

第１表　広岡古墳群周辺遺跡一覧表……6

第１章　調査経過

第１節　発掘調査に至る経過

県営鳥取地区広域農道は、広域営農団地農道として千代川及びその各支流に拡がる農耕地を結ぶ基幹農道として計画され、昭和49年（1974）から整備が進められている。広岡地区での建設工事が具体化したのは昭和60年（1985）からである。昭和60年度には、字光雲寺地内の古墳２基（広岡44・47号墳）が調査の対象となり、鳥取市遺跡調査団が発掘調査を実施したところである。

昭和61年（1986）１月には、新たに広岡集落から昭和60年度発掘調査地域に至る工事計画路線上の埋蔵文化財の有無について、原因者である鳥取農林振興局長から鳥取市教育委員会あて照会がなされた。これを受けて工事予定路線の現地踏査を実施したところ、県遺跡分布図に記載のない古墳２基（広岡49・50号墳）を新しく確認した。原因者あてにこの踏査結果について回答するとともに、その保護・保存について協議を行なったが、路線変更等が困難なこともあり最終的には発掘調査を実施することになった。発掘調査は、鳥取農林振興局の委託を受けて鳥取市遺跡調査団が実施した。

第２節　発掘調査の経過

現地での発掘調査作業は、1986年６月２日に開始し８月18日に終了した。今回発掘調査の対象となった古墳は、広岡49・50号墳の２基である。

資材の搬入、仮小屋の設置を終えて、調査地の立木の伐採作業から始める。同時にそれぞれの古墳について、主体部等の遺存状況を確認するためにトレンチを掘り下げた。このトレンチによって49号墳は、周溝等の外部施設を確認することはできなかったが、石棺の蓋石の一部を検出し、50号墳は周溝の一部を確認した。この後地形測量を行ない、50号墳は４区画、49号墳は６区画に分けて表土除去作業を実施していった。

広岡50号墳伐開作業風景

広岡49号墳石棺実測風景

50号墳は、周溝を完掘後、主体部検出作業に移ったが、盗掘による土砂の攪乱のため検出作業は手間どった。50号墳の主体部は、石材の遺存状況から二段掘りの墓壙内に箱式石棺が納められていたものと考えられた。墓壙、墳丘の実測が終了したのち、全景写真を撮影して８月１日に50号墳の調査を終了した。

49号墳は、表土除去作業ののち、７月29日に主体部墓壙を掘り下げ石棺の蓋石を完全に露出させる。未開口の箱式石棺である。蓋石の実測終了後、31日に蓋石を除去する。棺内からは、遺物、人骨とも認めることができなかった。しかしその後、棺内土砂の水洗調査の段階で管玉１点を検出した。墳丘に他の主体部、遺構の存在を考え、トレンチを設定し掘り下げるが、他に遺構は検出できなかった。８月５日～８日まで石棺の実測を行ない、終了後ただちに石材の抜き取り作業を行う。墓壙掘り方を検出し実測を行う。盆休み明けの18日には、石棺材、棺内土砂、資材等を搬出して、現地での作業を終了した。

その後、記録類の整理、報告書作成作業等の室内作業を昭和62年３月10日まで実施した。

第２章　歴史的環境

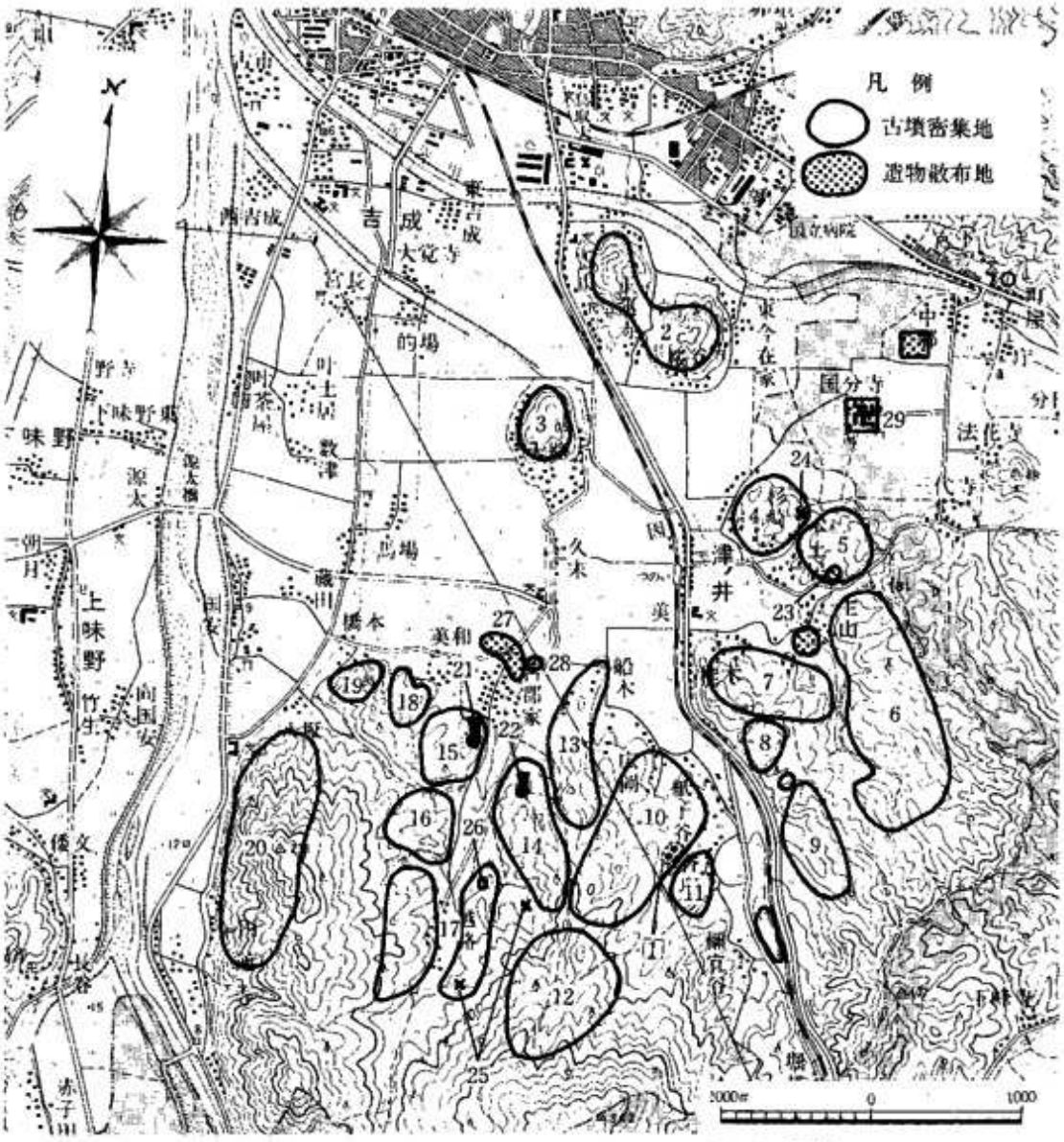
第１節　遺跡の位置と歴史的環境

広岡古墳群は、鳥取市街地より南へ６kmほど離れた広岡部落の背後の丘陵地に展開している。この北に面する標高60～80m前後の低丘陵は、鳥取市と郡家町を界する空山（標高340m）につづいている。これらの丘陵の間にはいくつもの小平野が形成されており、入りくんだ地形となっている。周辺の丘陵は、地質学的には円通寺礫岩層や粘土層及び安山岩を含むローム層からなっており、礫と粘土が互層となった露頭も随所で見ることができる。丘陵間の小平野は緩やかな傾斜で鳥取平野中央部へとつながっていく。鳥取平野は、中央を流れる千代川やその支流である袋川、大路川などによって運ばれた土砂によって形成された沖積平野である。この肥沃な平野は、古代から現代に至るまで人々の生活を支える重要な生産基盤となっている。

広岡部落は、丘陵の裾部に立地し、集落前面の平野部で水稲栽培が、背後の丘陵部では梨を中心とする果樹栽培が盛んに行なわれている。また、特色ある産業として、付近に産出する粘土を利用した瓦の生産があり、「津ノ井瓦」として広く知られている。

鳥取市広岡は、かつて因幡国法美郡に含まれ、1889年（明治22）津ノ井村の大字となり、1963年（昭和38）からは合併によって鳥取市の大字となって現在に至っている。

広岡の所在する鳥取平野南部の縄文・弥生時代の遺跡は、現在のところあまり知られていない。縄文時代の遺跡として、晩期前半の土器とともに貯蔵穴が検出された大路川遺跡がある。弥生時代の遺跡として、中期を主体とする久末・古郡家遺跡、流水文銅鐸の出土した越路銅鐸出土地がある。



1．広岡49・50号墳
2．面影山古墳群
3．大路川 〃
4．杉崎 〃
5．津ノ井 〃
6．生山 〃
7．桂木 〃
8．海蔵寺 〃
9．紙子谷 〃
10．広岡 〃
11．香取古墳群
12．空山 〃
13．船木 〃
14．六部山 〃
15．古郡家 〃
16．園原 〃
17．越路 〃
18．美和 〃
19．橋本 〃
20．八坂 〃
21．古郡家1号墳
22．六部山3号墳
23．津ノ井字祢遺跡
24．余戸窯跡
25．越路古窯址群
26．越路銅鐸出土地
27．久末・古郡家遺跡
28．大路川遺跡
29．因幡国分寺跡

第1図　鳥取市南東部遺跡分布図

この他にいくつかの石器、土器出土地が知られているが、詳細は不明である。

古墳時代に入ると、この地域の丘陵地帯には大小様々な古墳が築造されるようになる。古墳時代前・中期を代表する古墳として特異な埴輪、変形獣首鏡が出土した六部山３号墳（全長63m）、異形銅鏡、短甲などが出土した古郡家１号墳（全長90m）などの大型前方後円墳がある。後期になると小規模な円墳を中心とした古墳群が造営されるようになる。後期群集墳として広岡古墳群の南西に隣接する空山古墳群が良く知られている。この古墳群は、その多くが横穴式石室を主体部に持つ91基の古墳で構成されている。石室内部に鳥、木、舟などの線刻壁画を有する古墳があり、「中高天井」とともにこの地域の特徴となっている。なお、広岡古墳群にも弓を引く武人の線刻のある11号墳（坊ケ塚古墳）がある。この他には家形石棺の残る橋本古墳、馬鐸などの馬具の出土した六部山１号墳などが注目される。

古墳時代の集落については、ほとんど知られていないが、いくつかの遺物散布地等から丘陵上や現在の集落に重なって存在するものと考えられる。調査された遺跡として、貯蔵穴、竪穴式住居址が検出された津ノ井宇祢遺跡が知られている。

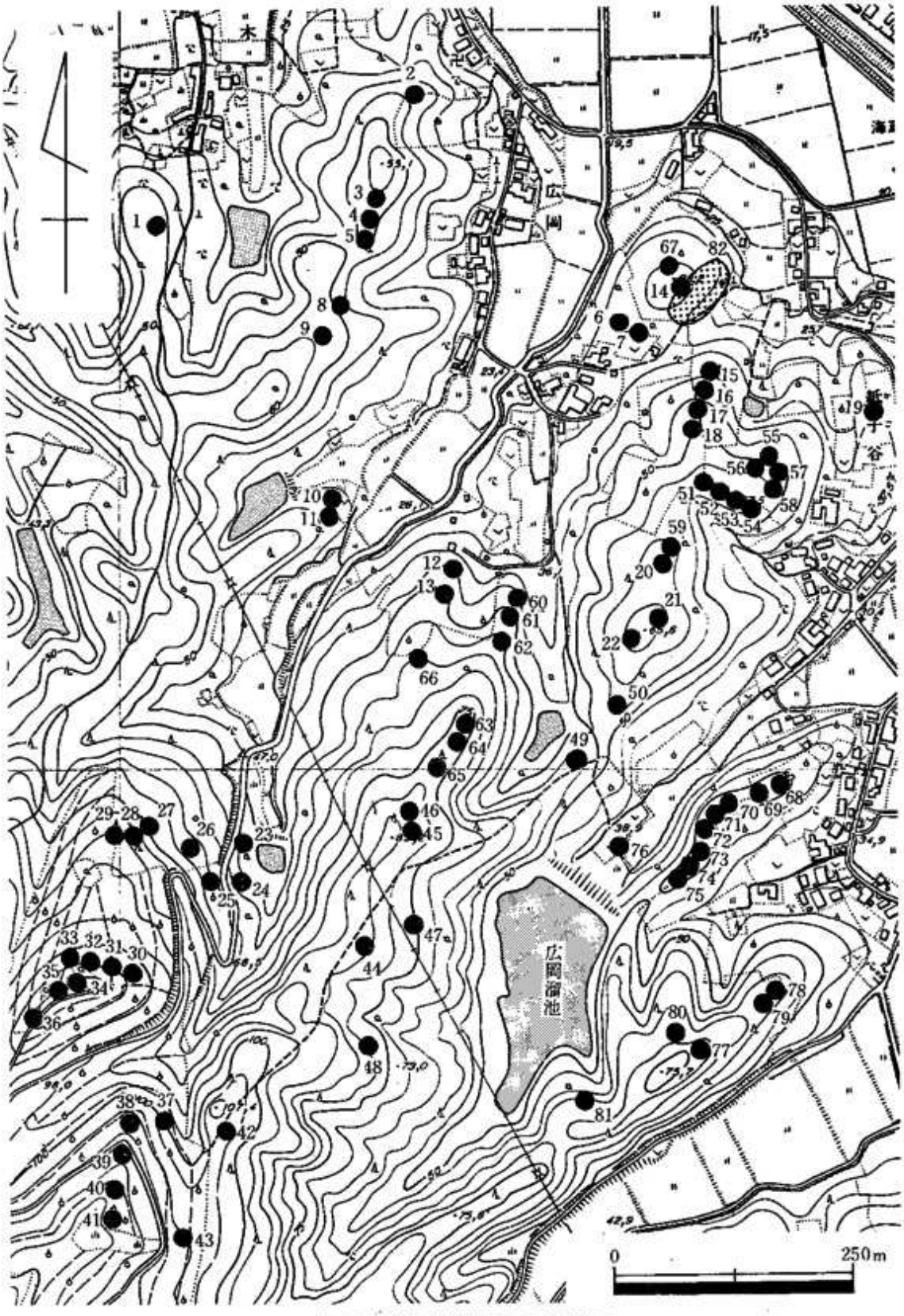
律令時代になると、この地域は因幡国邑美郡、法美郡に組み込まれる。因幡国府が法美郡に置かれたことからも、この地域が早くから因幡国の中心となっていたと考えられる。

第２節　広岡古墳群

広岡周辺の丘陵地は、梨を中心とする果樹栽培が古くから盛んであり、園地の造成や耕作による古墳の発見や遺物の出土も多い。このため、早くから考古学的な調査・研究の対象となり、市域でも古墳分布や横穴式石室の特色などが比較的把握されてきた地域である。

1924年（大正13）前後には木山竹治氏らの調査がすでに行なわれており、広岡11号墳（坊ケ塚古墳）などが、その調査成果である『鳥取縣史蹟勝地調査報告第二冊』に紹介された。その後1960年代前半には古郡家１号墳の発掘を契機とする鳥取大学歴史学研究会を中心とする調査があり、古墳の分布状況についてその大要が明らかにされた。この調査後は、空山古墳群などとともに横穴式石室内に線刻された壁画を重点とした調査・研究が進められてきた。このように広岡古墳群は、早くから注目を集め調査もされてきたが、発掘調査の手が入ったのはごく最近のことである。津ノ井ニュータウン造成の進展など周辺の開発を契機として、広岡古墳群にも本格的な時代の波が押し寄せてきたわけである。1985年（昭和60）には、農地造成、農道建設に伴って３基の古墳の発掘調査が実施された。この調査は本市で実施したもので、２基の横穴式石室墳と１基の木棺直葬墳が対象となった。このうち48号墳の未開口の横穴式石室からは、金銅装圭頭大刀をはじめ多量の須恵器、玉類が出土し、後期古墳研究の貴重な資料を提供することとになった。またこの調査では、墳丘列石など墳丘の構造、築造過程などにも新知見をもたらした。

さて、広岡古墳群は、広岡の集落の背後をＵ字形にとり囲む丘陵の各所に認められ、総数67基を



第２図　広岡古墳群周辺遺跡分布図

第1表　広岡古墳群周辺遺跡一覧表

（単位：m）

	古墳・遺跡名	種類	規模 直径×高さ	埋葬施設	出土遺物	備考	乗分布図の番号
1	広岡1号墳	古墳(円)	24× 1.5			墳頂部削平	888
2	2号墳	〃	12× 0.9				889
3	3号墳	〃	17× 1.3				890
4	4号墳	〃	9× 0.5				891
5	5号墳	〃	24×4				892
6	6号墳	〃	20× 2.4			今回の調査では確認できず	893
7	7号墳	〃	12× 0.5	横穴式石室		封土削平、　〃	894
8	8号墳	〃	14× 0.5				895
9	9号墳	〃	8× 0.3				896
10	10号墳	〃	15× 1.7	横穴式石室		破壊	897
11	11号墳	〃	15× 1.8	横穴式石室(片袖)		人物像線刻あり、坊ヶ塚古墳	898
12	12号墳	〃	——	箱式石棺	須恵器	封土削平、今回の調査では確認できず	899
13	13号墳	〃	——			封土削平、　〃	900
14	14号墳	〃	22×3			(旧)木の実神社	901
15	15号墳	〃	8× 0.5			今回の調査では確認できず、別に確認した古墳(51～54号墳)の可能性あり	902
16	16号墳	〃	9× 1				903
17	17号墳	〃	15× 1				904
18	18号墳	〃	10× 0.6				905
19	19号墳	〃	16× 2.2				906
20	20号墳	〃	12× 1.1				907
21	21号墳	〃	14× 1			ほぼ完存	908
22	22号墳	〃	13× 1			ほぼ完存、溜	909
23	23号墳	〃	——	横穴式石室		露出破壊	910
24	24号墳	〃	15× 1.5	横穴式石室		露出破壊	911
25	25号墳	〃	——	横穴式石室		破壊	912
26	26号墳	〃	20× 1.5	横穴式石室		天井石露出	913
27	27号墳	〃	10× 0.6				914
28	28号墳	〃	30× 2				915
29	29号墳	〃	10× 0.5				916
30	30号墳	〃	——				917
31	31号墳	〃	14× 0.5				918
32	32号墳	〃	9× 0.5				919
33	33号墳	〃	10× 0.6	横穴式石室		破壊	920
34	34号墳	〃	9× 0.5				921
35	35号墳	〃	9× 0.5	横穴式石室		破壊	922
36	36号墳	〃	——	横穴式石室		破壊	923
37	37号墳	〃	16× 1	横穴式石室		露出破壊	924
38	38号墳	〃	12× 1.4	横穴式石室		天井石露出	925
39	39号墳	〃	9× 0.5				926
40	40号墳	〃	14× 1.6	横穴式石室		破壊	927
41	41号墳	〃	15× 1.2			変形	928
42	42号墳	〃	17× 2.4	横穴式石室		破壊	929
43	43号墳	〃	10× 0.7			封土為削平	930

	古墳・遺跡名	種類	規模 直径×高さ	埋葬施設	出土遺物	備考	県分布図の番号
44	広岡44号墳	古墳(円)	11.5× 0.7	木棺直葬	土師器	1985年調査、消滅	931
45	45号墳	〃	15× 1.2			墳	932
46	46号墳	〃	15× 2.2			墳、墳頂部陥没	933
47	47号墳	〃	11× 1.7	横穴式石室	須恵器、土師器、玉、耳環他	1985年調査、消滅	
48	48号墳	〃	17.5× 0.9	横穴式石室	須恵器、玉、耳環、金銅装大刀他	1985年調査、消滅	
49	49号墳	〃	20× 2.7	箱式石棺	管玉	1986年調査、本報告、消滅	
50	50号墳	〃	10× 1.4	箱式石棺	なし	1986年調査、調査時すでに盗掘をうける、本報告、消滅	
51	51号墳	〃	8.7× 0.5			15～18号墳の可能性あり	
52	52号墳	〃	12.3× 0.5				
53	53号墳	〃	13× 1				
54	54号墳	〃	14× 1.2				
55	55号墳	〃	13× 1.2				
56	56号墳	〃	13× 1				
57	57号墳	〃	13.6× 1.2			58号墳とともに前方後円墳の可能性あり	
58	58号墳	——	——			57号(後円部)、58号前方部	
59	59号墳	古墳(円)	13× 1.2			盗掘坑あり	
60	60号墳	〃	13× 1				
61	61号墳	〃	11× 0.9				
62	62号墳	〃	11× 1			墳丘東側流出	
63	63号墳	〃	13× 1.4				
64	64号墳	〃	11× 1.1			墳丘東側流出	
65	65号墳	〃	——			半壊	
66	66号墳	——	——	横穴式石室?		石材採出	
67	67号墳	古墳(円)	——			封土削平、周溝あり	
68	雷取1号墳	〃	10× 0.5	箱式石棺		破壊	934
69	2号墳	〃	12.8× 1			3/4破壊	935
70	3号墳	〃	5 × 0.5				936
71	4号墳	〃	13.5× 1.5				937
72	5号墳	〃	18× 1.7				938
73	6号墳	〃	14× 1.5				939
74	7号墳	〃	12.5× 1.7				940
75	8号墳	〃	8 × 1				941
76	9号墳	——	——			消滅?	942
77	10号墳	古墳(円)	12× 1.6		須恵器	墳、墳丘削平、落ち込みあり	943
78	11号墳	〃	11× 0.9			盗掘坑あり、東側畑で削平	
79	12号墳	〃	18× 2.2			墳、ほぼ完存	
80	13号墳	〃	7.3× 0.3				
81	14号墳	〃	13× 3.5	横穴式石室?			
82	広岡遺跡	遺物散布地			弥生式土器、古式土師器		

※本表及び第2図は『改訂・鳥取県遺跡地図第1分冊』1973年に一部加筆・訂正して作成したものである。

数える。1973年（昭和48）発刊の『改訂・鳥取県遺跡地図－第１分冊－』には46基の古墳が登載されていたが、その後の開発事業に伴う分布踏査などが実施され、1985年（昭和60）の発掘調査時には53基に増加していた。今年度には、今後増加するであろう開発事業に対処するため、一部地域について新たに踏査したところ67基を数えることとなった。しかし、この67基の中には分布図に登載されていても現在所在が確認できない古墳、すでに消滅したと考えられる古墳、重複の可能性を指摘できる古墳もあり、かならずしも古墳群の実数を表わすものとはいい難い。とりわけ横穴石室墳の群集していた集落の谷奥は、現在大規模な果樹園となっており、消滅している古墳も多くあるものと考えられる。

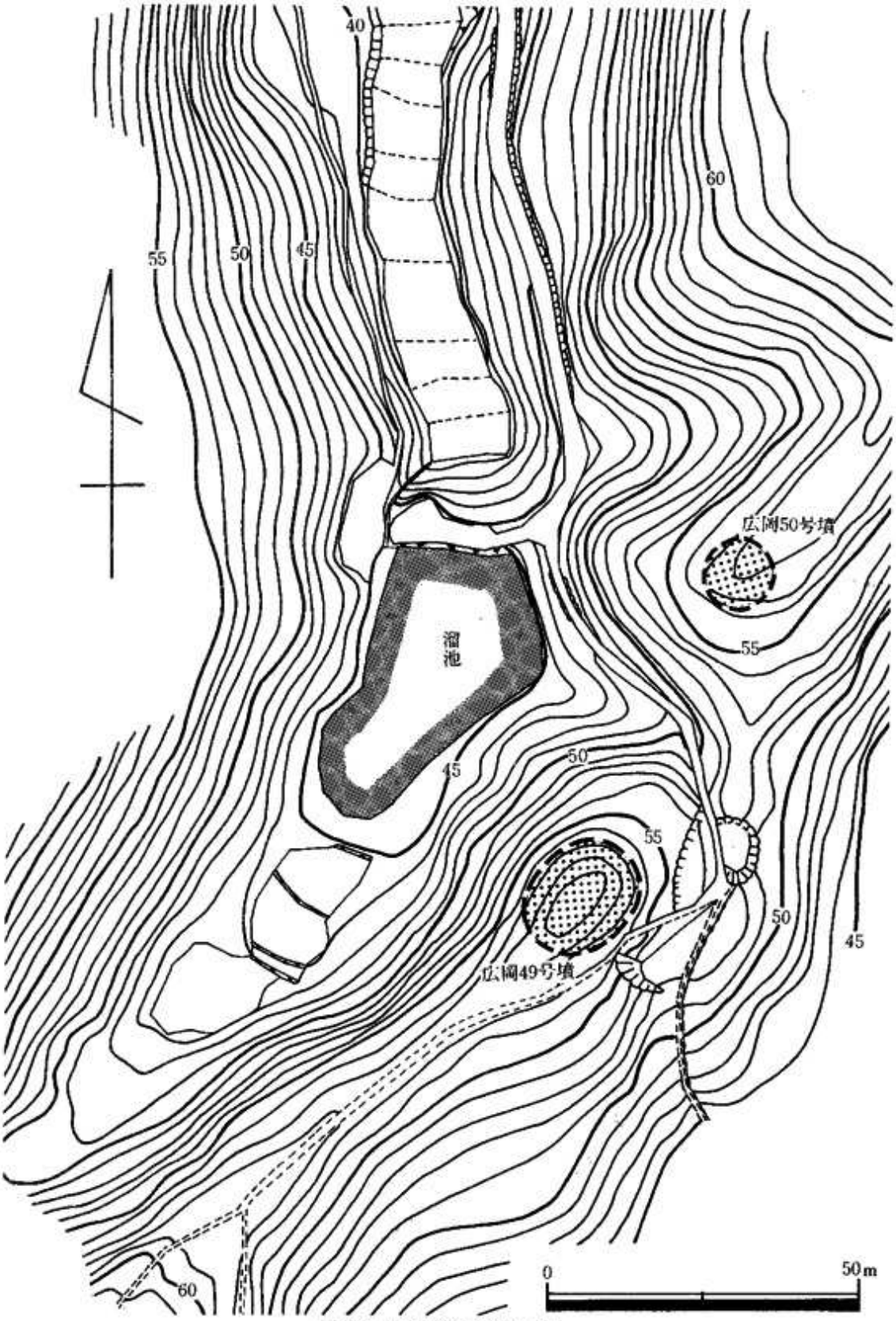
67基の古墳は、すべて後期を中心として築造された円墳と考えられている。内部主体が何らかの形で明らかになっている古墳は21基あり、箱式石棺３基、木棺直葬１基、横穴式石室17基という内訳になる。67基の古墳は、立地や分布状態によってもいくつかに分類することができ、大きく見れば三様のあり方が認められる。第１に尾根主稜線上に数基でまとまり、箱式石棺、木棺直葬などの比較的簡単な埋葬施設を採用する今回調査を実施した２基の古墳を代表とするもの。第２に広岡10・11号墳や前回調査した47・48号墳のように２、３基で小群を形成し、丘陵の斜面や裾部などに立地し横穴式石室を持つもの。最後に丘陵緩斜面に群在し、横穴式石室を埋葬主体として採用するグループということになろう。このように広岡という現在の行政区域内に所在する67基の古墳のあり方は一様ではない。これには築造時期、被葬者の性格等いくつかの要因が指摘されようが、今後の課題である。

第３章　調査の概要

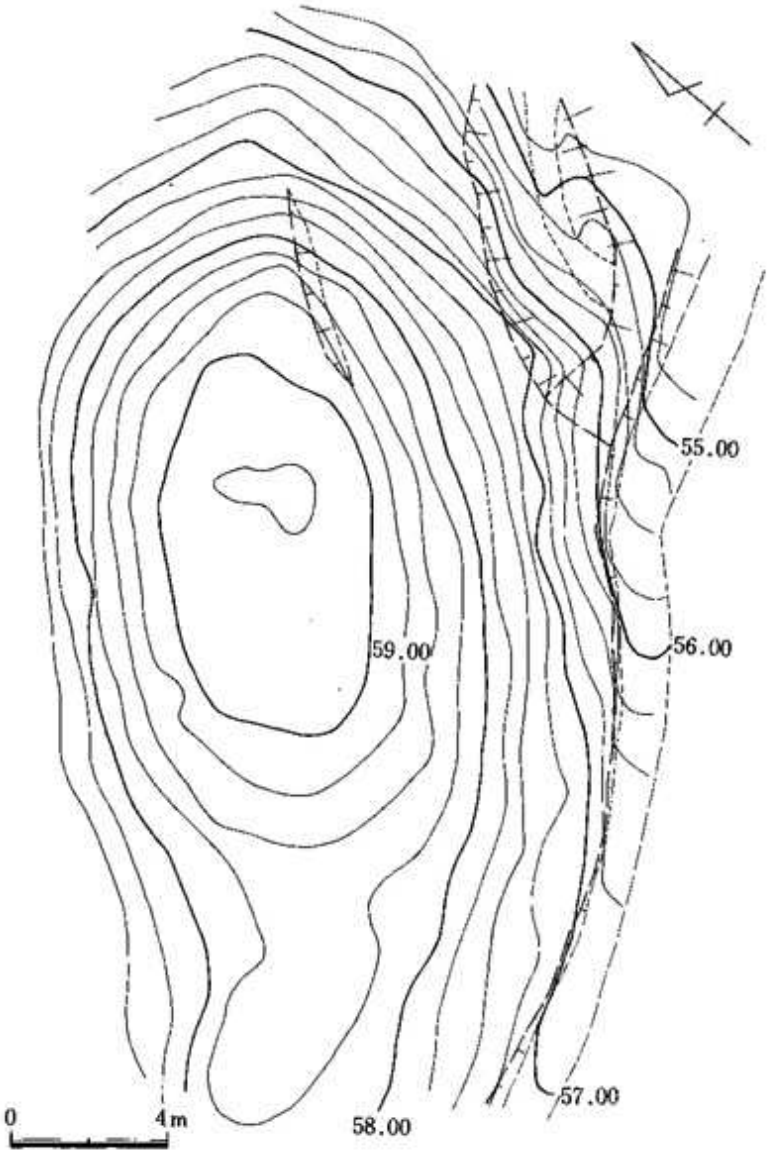
第１節　広岡49号墳

１．位置と現状

広岡49号墳は、空山から北東へ延びる丘陵の先端部付近の尾根稜線上に位置している。墳丘の遺存状態は比較的良好であり、盗掘等による落ち込みは認められなかったが、墳丘東側の裾部に土砂採取によるものとも思われる地形がみられ、崖状となっていた。墳丘の南側裾部を緩やかな傾斜で山道が通っている。この山道は、西の方へ向かうと、ゆっくりと傾斜を上げながら丘陵尾根を通って空山へと続き、東の方へ下ると、大きく左へ曲りながら49号墳と50号墳の間の低い切り通しを通り広岡へと下っていく。墳丘南西側の裾部に稜線と直交するように浅いくぼみがあり、周溝の存在が予想された。墳丘の南東側は、墳頂部から傾斜を増しながら山道へ下り、道となっている平坦部を過ぎて再び急斜面となり谷へ続いている。北西側は、墳頂部から急斜面となり一気に下って溜池となっている。



第3図　発掘調査古墳位置図

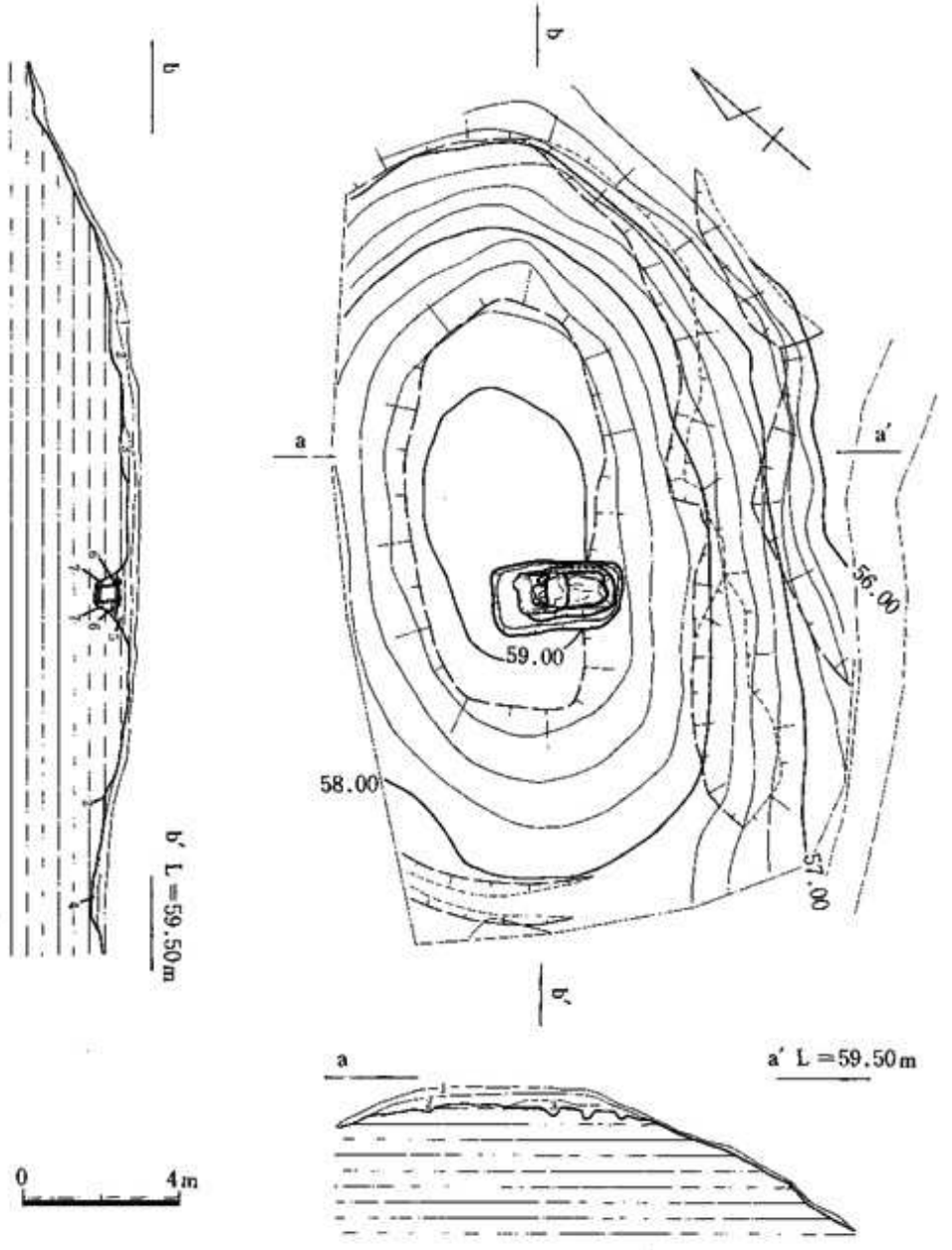


第４図　広岡49号墳地形実測図

調査前の墳頂部の標高は59.3ｍで、南西部の墳丘裾と思われる部分との比高差は約１ｍ、広岡集落との比高差は39ｍであった。なお、墳丘の北西側の斜面、古墳の$\frac{1}{3}$ほどが今回の調査地域の範囲外となっているため、遺構の全容を詳細に解明することはできなかったが、古墳の性格、埋葬施設などを明らかにすることができた。

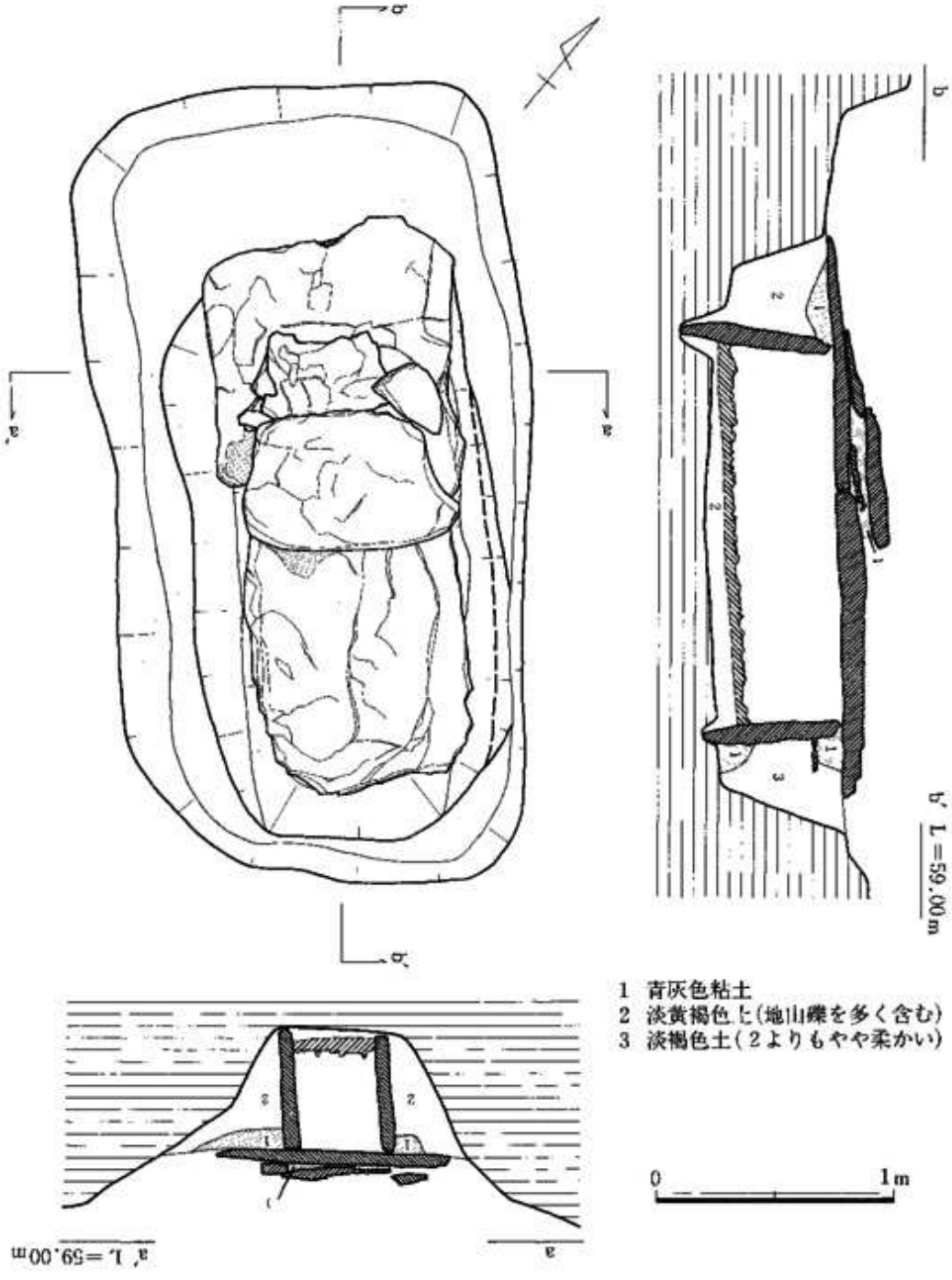
２．墳丘の構造

本古墳は、現状では楕円形を呈する円墳と考えられた。南西部分では地山を整形してあるだけで、ほとんど盛土がみられない。墳頂部から南東部、北東部では地山を整形し、その後で、盛土を最大0.6ｍの厚さで施している。ほぼ原状を残しているが、若干の盛土の流出はあったものと思われる。

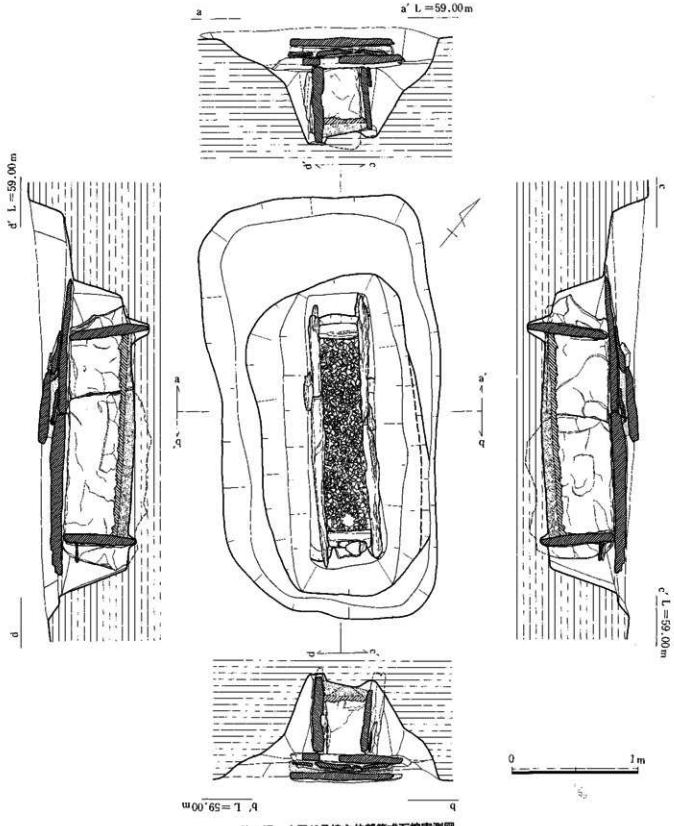


1 表土
2 淡黄褐色土(盛土、やや灰味をおび2～5cm大の円礫を多く含む)
3 淡黄褐色土(1～2cm大の礫を含む)
4 暗褐色粘砂質土
5 淡黄褐色土(主体部埋土、礫、角礫、円礫を含む)
6 青灰色粘土
7 淡黄褐色土(地山礫を多く含む)

第5図　広岡49号墳墳丘遺存図

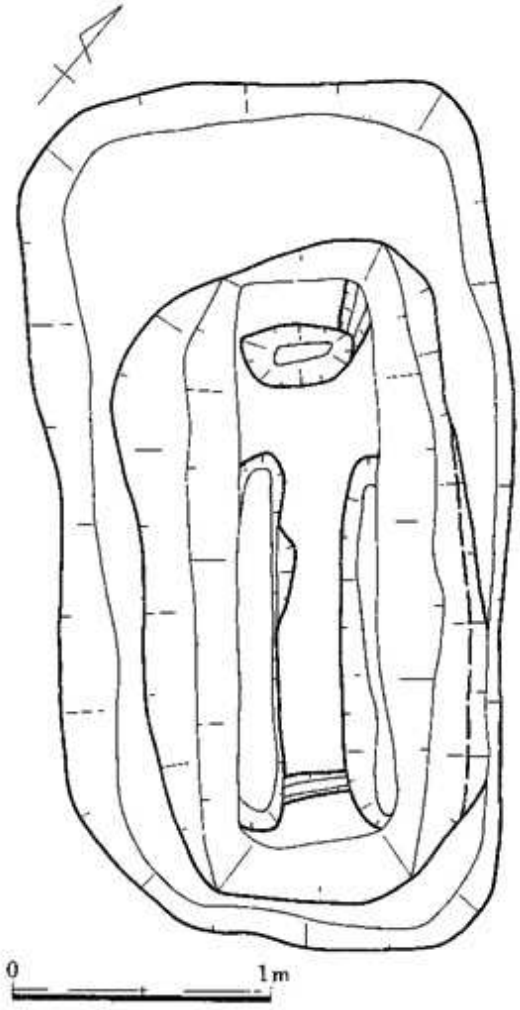


第6図　広岡49号墳主体部実測図



第7図　広岡49号墳主体部箱式石棺実測図

したがって、南西部にも盛土があったと推測され、南東部から北東部にかけても、もう少し厚い盛土を施していたものと思われる。墳丘の南東側斜面が、急な傾斜となっているため本古墳は楕円状となっているが、これは、山道が古墳の裾付近を通っていることを考え合わせると、南東側斜面がかなり削られている可能性が考えられる。したがって現状では楕円形を呈しているが、築造当初は、真円に近い形をした直径20mほどの円墳だったのではないかと考えられる。周溝は、墳丘南東部から北東部においては、急斜面となっているため検出されなかったが、南西部の平坦面でその一部が検出された。調査区域外の北西部へ続いているため詳細は不明であるが、北西部も南東部と同様に急斜面となっているため本来全周するとしても、現状では流失している可能性が高い。検出された周溝は、幅1m、深さ0.4mで、断面が皿状を呈する溝となっている。墳丘の高さは、墳丘北東側基底部から表土除去後の墳頂部まで最大2.7mを測る。

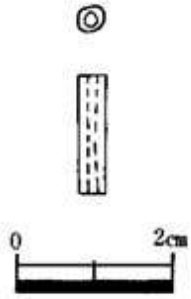


第8図　広岡49号墳主体部墓壙実測図

3．埋葬施設

墳丘中央から南西へ1mの地点で埋葬施設を1基検出した。当初検出された位置が墳丘中央を少しはずれていることから、北西部の墳頂部平坦面を中心に精査したが、他に埋葬施設は検出されなかった。主体部は、丘陵の尾根の稜線に対し直交するように造られていた。主体部の埋葬形態は、板石を組み合せた箱式石棺であった。墓壙は長軸3.3m、短軸1.8mの隅丸長方形を呈し、二段掘りになっている。断面観察により墓壙は、地山を掘り込んで造られていることがわかった。まず、1段目深さ0.1m～0.35mまで掘り、その少し南東よりに、さらに0.6mほど掘り下げて二段目の掘り方としている。二段目の掘り方は、長軸2.5m、短軸1.25mの隅丸長方形で、墓壙底部には小口及び側板の石棺材を固定するための溝を穿っている。南西側の側板溝は、長さ1.45m、幅0.15m、深さ0.14mで南東側小口穴から北西へ1.25mのところまで掘り込まれている。北東側の側板の溝は長さ1.45m、幅0.2m、深さ0.12mで南東側小

口穴から北西へ1.2mのところまで掘り込まれている。両側板の小溝が掘り下げられているのはちょうど石材の継ぎ目の部分までである。これは、それぞれ2枚づつの石材で構成されている両側板とも北西側にやや小さめの石材が使われており、北西側の石材の高さと南東側に使われるやや大きめの石材の高さとを合わせるため、石材の大きさに応じて小溝を掘り下げていったためと考えられる。北西側の小口板の小溝は、長径0.42m、幅0.1m、深さ0.07mを測り、両側板溝とつながっている。



第9図　広岡49号墳出土管玉実測図

石棺の主軸は、北－43°－西をとり、規模は内法で長さ1.58m、北西側小口幅0.36m、南東側小口幅0.35mである。深さは側板の上端より0.4m前後である。石棺の構造は、北西側小口、南東側小口にそれぞれ1枚の板石を用い、両側板には2枚の板石を用いて側板が小口板をはさみこむ形で組み合せ構築している。二段目の墓壙掘り方と石棺材の間は、淡黄褐色土及び淡褐色土で裏込めされるが、南東側小口板と掘り方の間には青灰色粘土が用いられて小口板を固定している。最後に石棺の周囲を縁どるように上端から深さ10～20cm、幅20～25cmの範囲で青灰色粘土が用いられる。棺床は、地山面の上に淡黄褐色土を8cm前後の厚さに叩きしめて整え、少量の円礫を含む角礫を主体とした礫を7cm前後の厚さに敷きつめている。蓋石は、まず最初に2枚の大きな板石で石棺を覆う。この2枚の板石の接する部分は、密着するようほぼ直線状に加工されている。次に、この2枚の大きな蓋石の隙間を塞ぐように30cm×20cm前後の板石を11枚重ね、その上に90cm×60cm、50cm×30cmの扁平な板石2枚を重ねる。そして、これらの各工程毎に隙間の部分を中心に目張りの粘土が用いられていた。蓋石は石棺の幅に比べて大きなものが使われており、かなり側板の外へ張り出すような形になっている。

石棺の遺存状態は非常に良好であり、棺内に流入土はみられなかったが、人骨は遺存していなかった。このため埋葬頭位は不明であるが、石棺南東側小口付近に、棺床の礫が直径10cm程の円形状を呈してくぼんでいる箇所がみられること、また、南東側から北西側へ棺床の傾斜が下がっていることなどから南東側が頭位であった可能性が高い。

石棺に使われていた石材は、この付近の丘陵で産出する粗面安山岩である。棺床に敷かれていた角礫も同じ粗面安山岩を小割りにしたものである。また、角礫の中にわずかであるが混入していた円礫は、盛土中にもよく見られたが、これは付近の丘陵を形成している円通寺礫岩層のものと思われる。目張りに使用されていた青灰色粘土もこの丘陵から産出するものである。

4．出土遺物

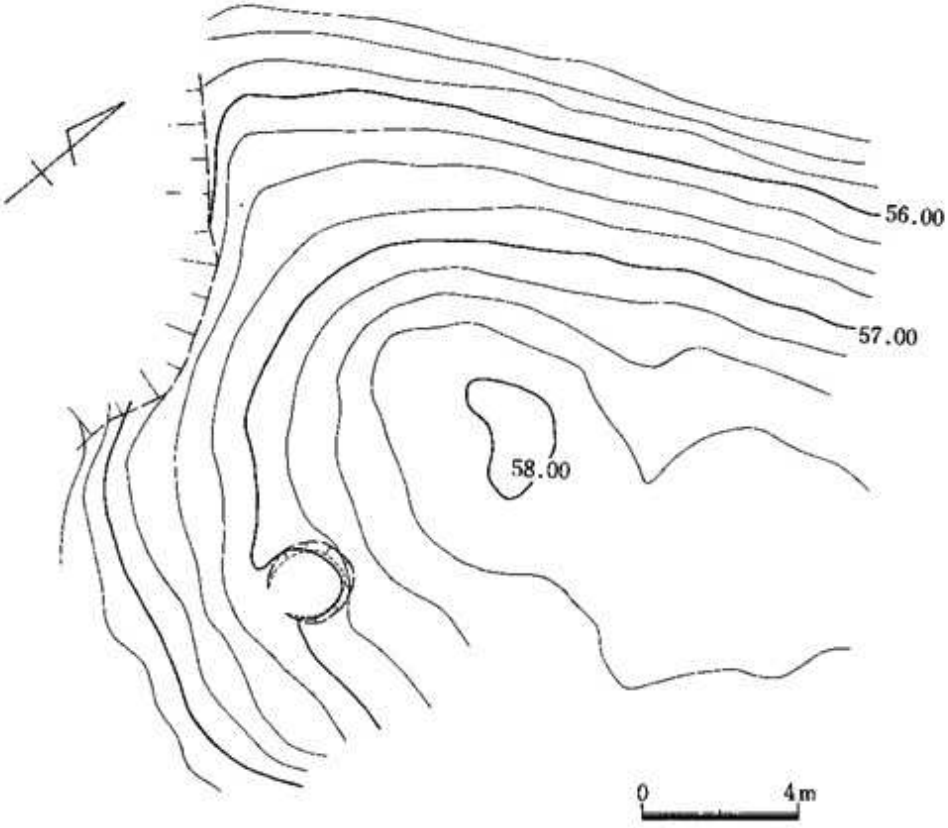
遺物は、棺内に敷かれていた角礫を取り上げた後の水洗精査作業中に採取された緑色凝灰岩製の管玉1点だけであった。棺内での詳細な出土位置は不明である。管玉は、両面穿孔されたもので、長さ15.2mm径3.2mm重量0.2gである。

このほか墳丘及び周溝からも土器などの遺物は全く出土しなかった。

第２節　広岡50号墳

１．位置と現状

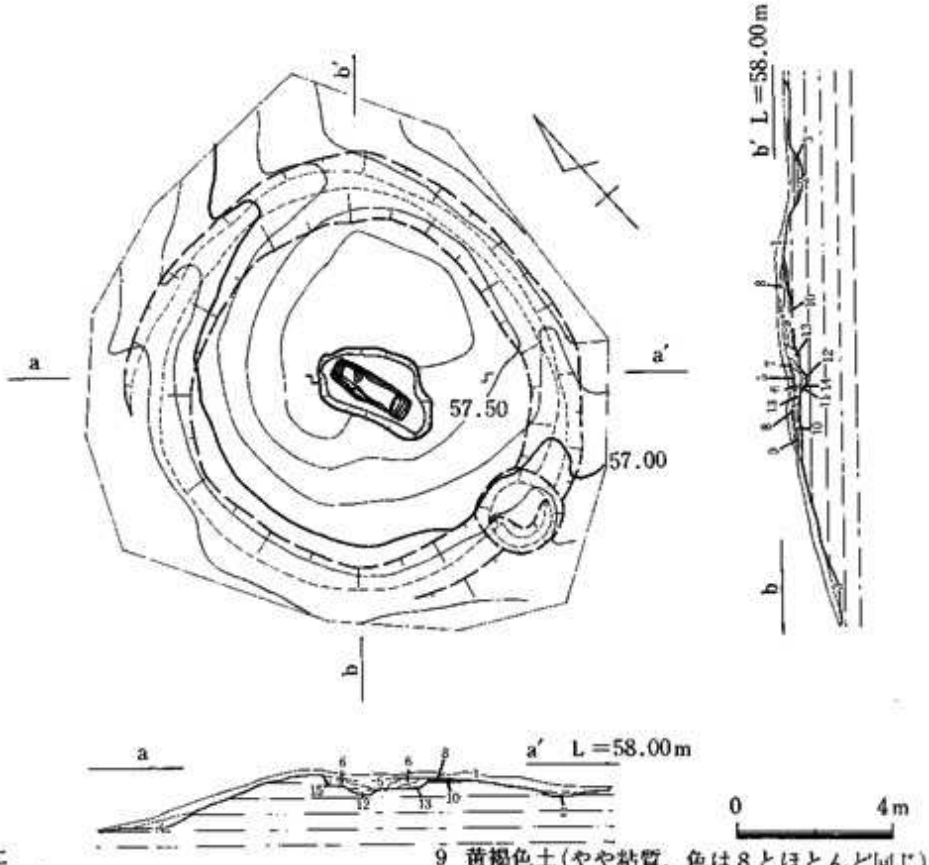
広岡50号墳は、広岡49号墳の北東部、丘陵鞍部を隔てた尾根主稜線上に位置する。50号墳の現況は丘陵がやや平坦になっている場所に小高い盛り上がりをみせており、墳丘の北東側から南東側にかけては、周溝と思われるくぼみも確認できる状況であった。墳丘南側の裾野に、直径２ｍほどの円形の落ち込みがみられた。墳頂部の平坦面にも、やや落ち込みがあり、盗掘を受けている可能性が考えられた。墳丘の立地している平坦な丘陵は、墳丘北西側から南西側にかけて、墳裾を少し過ぎたあたりから急な傾斜で山道へと下っている。墳丘東は、緩やかに傾斜を上げながら、丘陵先端部へと延びている。調査前の墳頂部の標高は58ｍで、北西側の墳裾部との比高差は1.5ｍ、広岡集落との比高差は38ｍを測る。



第10図　広岡50号墳地形実測図

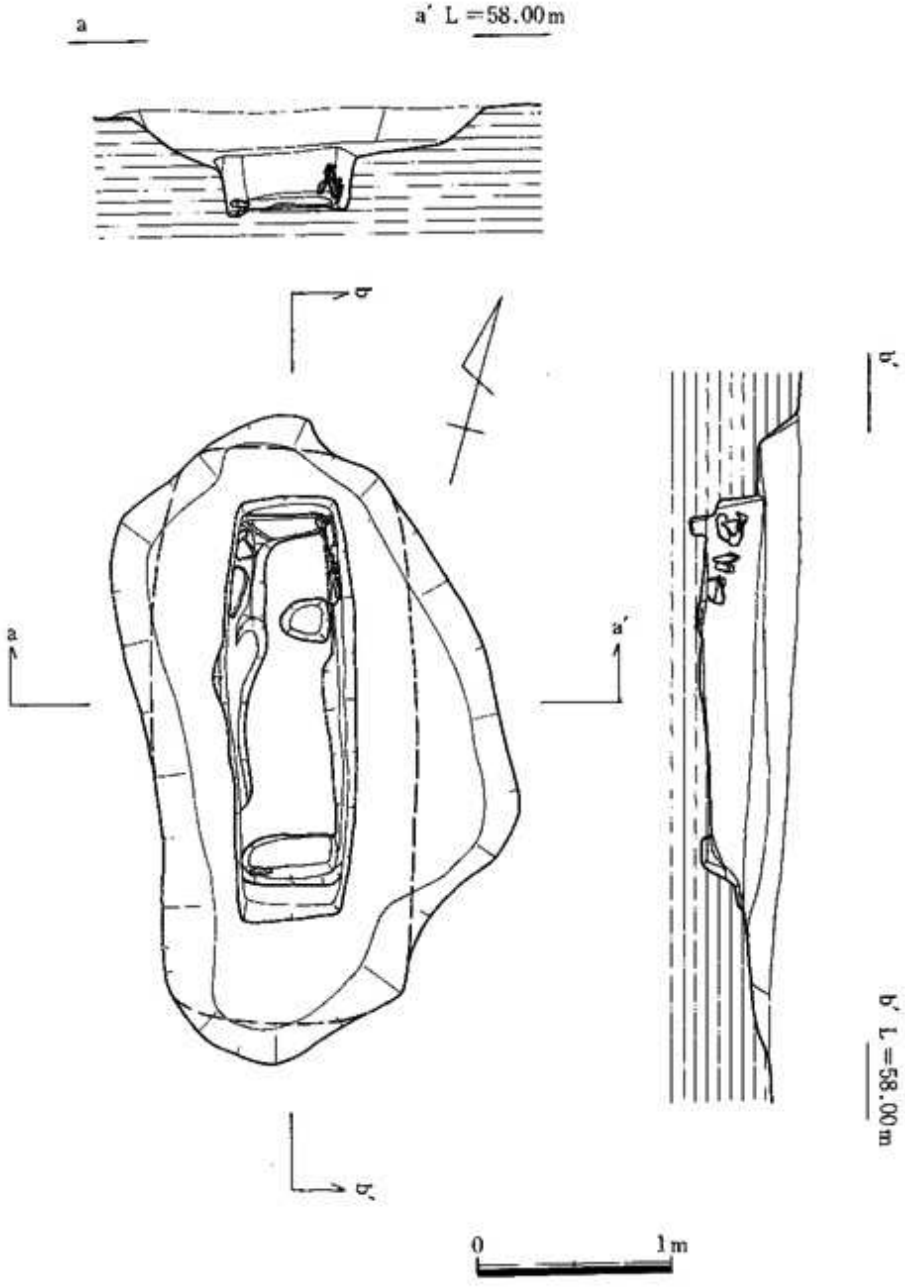
2．墳丘の構造

50号墳は、直径10mの小規模の円墳である。墳丘の築造は、地山を掘り込んで周溝を設定し、地山を削り出して墳丘斜面を形成し、さらに墳頂部で最大0.5mの盛土を施して行なわれている。盛土の下には、旧地表と考えられる暗褐色土が表われる。この土層を観察すると、古墳築造前の旧地形は緩やかな傾斜の自然地形であったことがわかる。墳頂部は平坦であり、一部くぼんでいる箇所も認められたが、調査を進めていくうちに、これは盗掘を受けるとともに削平されたためであることが判明した。周溝は、丘陵の傾斜が徐々に上がっていく墳丘東側に設けられていた。西側では、全周の$\frac{1}{3}$ほどが傾斜にそって消えている。周溝の幅は1.4mから最大1.7mで、深さは最大0.3mであった。墳頂部と北西側墳丘基底部との比高差は1.4mを測る。墳丘南側の周溝部に直径2m、深さ0.25mの樹木の抜き取り穴と思われる落ち込みが検出された。表土除去作業中に、墳丘からいくつかの板状の石材が出土しているが、遺物は墳丘からも周溝からも出土していない。



1 表土
2 暗褐色土
3 灰褐色土
4 暗茶褐色土
5 暗褐色土
6 灰褐色土 } (撹乱土、やや粘質)
7 淡褐色土
8 淡黄褐色土(1～2cm前後の礫をまばらに含む)
9 黄褐色土(やや粘質、色は8とほとんど同じ)
10 暗褐色土(旧表土)
11 青灰色粘土
12 淡褐色粘質土
13 黄褐色土(主体部埋土)
14 11と12の混合土
15 褐色粘砂質土(撹乱土)

第11図　広岡50号墳墳丘遺存図



第12図　広岡50号墳主体部実測図

3．埋葬施設

墳丘のほぼ中央部で、埋葬施設を１基検出したが、すでに盗掘されていた。墳頂部が浅くくぼんでいたのは、盗掘坑によるものであった。主体部は、土層断面の観察によって二段掘りの墓壙であることが判明した。墓壙上面は盗掘による攪乱のため、ほとんど原状をとどめていないが、わずかに残っている墓壙の掘り方から、本来は３ｍ×1.5ｍほどの大きさの墓壙であったと推測できる。

段目の深さは約0.25mである。二段目の掘り方上面は、盗掘による損壊がほとんどない状態で検出された。長軸2.2m、短軸0.51m、深さ0.25mの隅丸長方形であった。攪乱された埋土を除去する際に、床面に敷いてあったものと考えられる小円礫が出土した。攪乱土を除去すると、墓壙底部が検出された。墓壙底部の四周は残りが良く、小口板、側板を固定するための小溝が認められた。南側小口穴は、長さ0.4m、幅0.2m、深さ0.1mの隅丸長方形であった。北側のそれは、長さ0.4m、幅0.12m、深さ0.15mの隅丸長方形である。東側の側板溝は、長さ1.7m、幅0.2m、深さ0.05mの溝状で、西側の側板溝は長さ1.4m、幅0.2m、深さ0.05mであった。この2段目の墓壙の北側と南側では、小口、側板の裏込めの石材あるいは棺材が抜き取られた際の残片ではないかと思われる板状の石材片が出土している。また、小口及び側板の溝からは青灰色粘土が検出された。石材の固定、目張りのために使用されたものであろう。二段目の墓壙の主軸は、北－17°－西にとる。

以上、発掘調査によって知りえた墓壙の状況、石材等の遺存状態から50号墳の主体部は、二段に掘り込まれた墓壙内に内法で約1.5m×0.4mの組み合せ式の箱式石棺が埋置されていたことが推測される。また、棺床には砂利石が敷きつめられ、棺の組み合せには、裏込めや目張りの粘土が使われていたものと考えられる。なお、墓壙は、盛土を行なった後に盛土上から掘削されており、二段目の掘り方はさらに地山を掘り込んでいる。墓壙からも遺物は全く出土しなかった。

第4章　まとめにかえて

今回の発掘調査は、県営鳥取地区広域農道建設予定地内に所在する2基の古墳を対象としたものであった。ここで簡単にまとめておきたい。

墳丘　49、50号墳とも墳丘は必ずしも良好な遺存状態であったとはいえないが、ともに円墳であることが確められた。規模は、49号墳が直径20m、50号墳が直径10mである。周溝は、49号墳では一部の検出にとどまったが、50号墳では全体の$\frac{2}{3}$程が検出されている。墳丘は、50号墳が表土の上に盛土を置くのに対し、49号墳では丘陵の削り出しと盛土によって築造されていて、より墳丘の高さを作り出している。

埋葬施設　2基の古墳とも箱式石棺を埋葬主体とするものであった。箱式石棺は、二段に掘り込まれた墓壙内に納められていたが、49、50号墳では墓壙の掘削方法に異なる点が見られる。49号墳は、盛土を施す前に墓壙を掘削しているのに対し、50号墳では旧地表面上に盛土を施した後に、盛土、上から地山を掘り込み二段の墓壙を穿っている。49号墳の箱式石棺は、付近に産する粗面安山岩を扁平に割り板状として作られていたが、合せ目など一部に細い加工を施している。二段に掘り込まれた墓壙の下段に箱式石棺は組み合わされるが、墓壙底部には石材を固定させるための小口穴、側板溝が認められる。石材の継ぎ目には青灰色の粘土で目張りがされ丁寧な作りとなっている。棺床には角礫を主体とする礫が敷かれていた。50号墳の主体部は盗掘されていたが、残存していた石材

や墓壙底に掘り込まれた小口穴、側板溝から49号墳同様に二段掘りの墓壙内に箱式石棺を納めていたものと考えられる。また、目張りに使用されたと考えられる粘土、床面に敷かれていたと考えられる砂利石も出土している。49、50号墳とも非常に良く似た埋葬形態であるが、墳丘の規模と同様に49号墳の方が墓壙、石棺ともやや上まわる規模を持っている。

築造時期　49号墳から出土した遺物は、棺内から出土した管玉１点だけであり、これだけでは古墳の築造時期を推定することはできない。50号墳も盗掘のためか遺物は出土しておらず、築造時期を示す資料に欠ける。このため、墳丘、箱式石棺の構造から推定しなければならないが、近年の本市における調査事例などからすれば古墳時代中期から後期初頭に築造されたと考えることができる。おおむね５世紀中頃から６世紀の初めの頃となろう。副葬品が無いか、あってもわずかであるというのもこの時期の小規模古墳の一つの特徴といえる。両古墳の築造順についても明確にはしがたいが、埋葬方法、位置関係からあいついで築造されたものであろう。

主要参考文献

梅原末治「因伯二国に於ける古墳の調査」『鳥取縣史蹟勝地調査報告』第二冊　鳥取県　1924年

古郡家１号墳調査団「美和古墳群」『ひすい』78～100号　佐々木古代文化研究室　1960～1962年

『鳥取県史』　第１巻　鳥取県　1972年

「大路川遺跡調査概報」『鳥取市文化財報告書Ⅲ』　鳥取市教育委員会　1978年

『久末・古郡家遺跡発掘調査報告書』　鳥取市教育委員会　1974年

『津ノ井宇祢遺跡・津ノ井40号墳』　鳥取市教育委員会　1984年

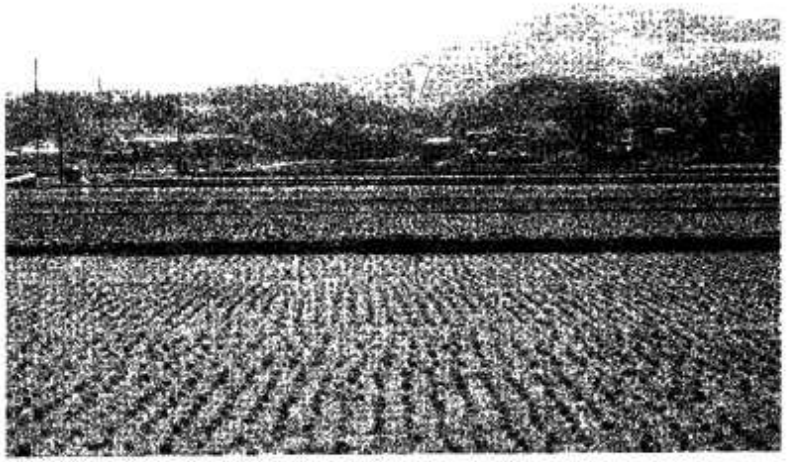
『広岡古墳群発掘調査報告書』　鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団　1986年

『鳥取県装飾古墳分布調査概報』　鳥取県教育委員会　1981年

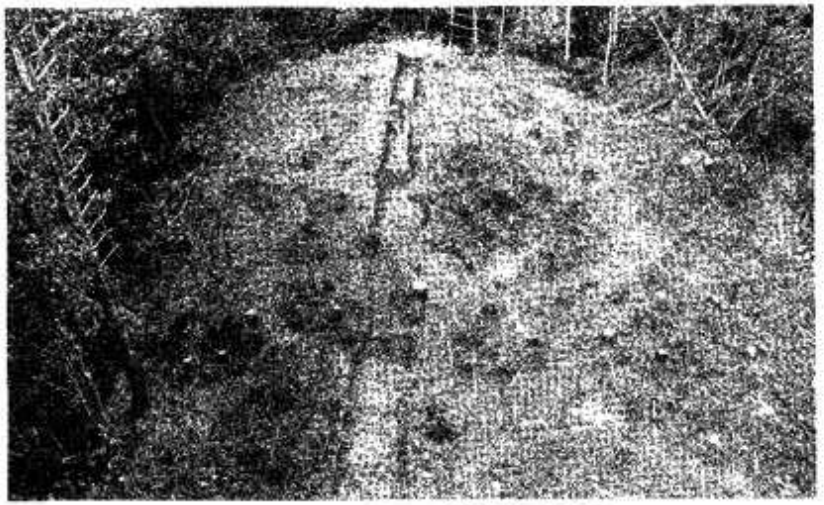
『改訂・鳥取県遺跡地図－第１分冊－』　鳥取県教育委員会　1973年

『鳥取県の古墳』　鳥取県埋蔵文化財センター　1986年

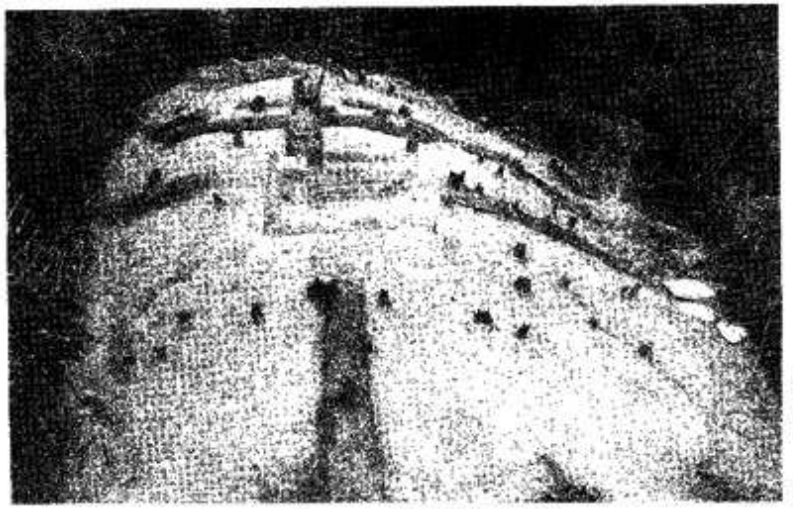
1．調査地遠景（東から、調査地矢印）



2．調査地遠景（北から、調査地矢印）

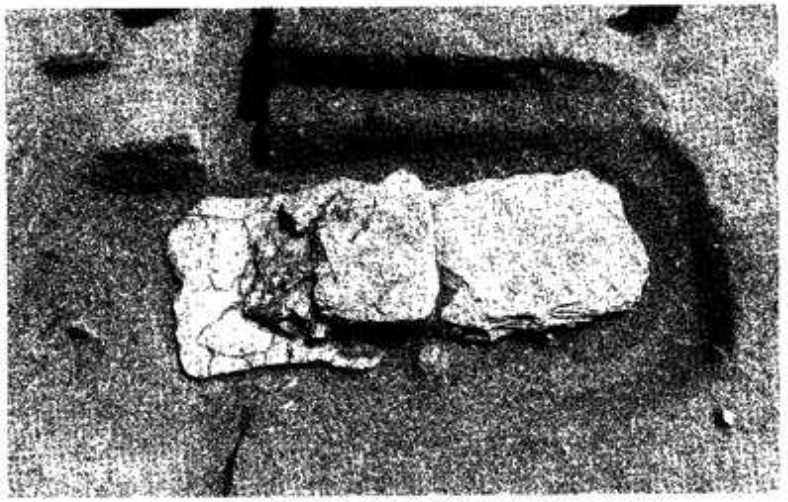


3．調査前の広岡49号墳（南西から）

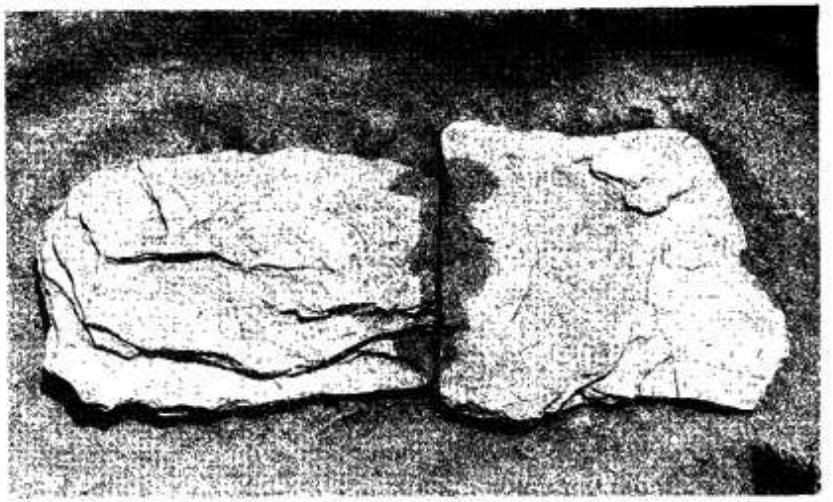


4．同　墳丘（南西から）

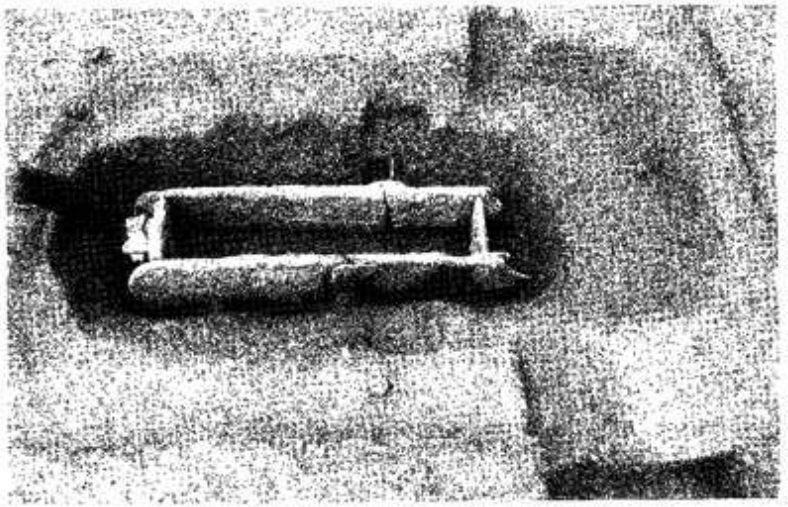
図版 1



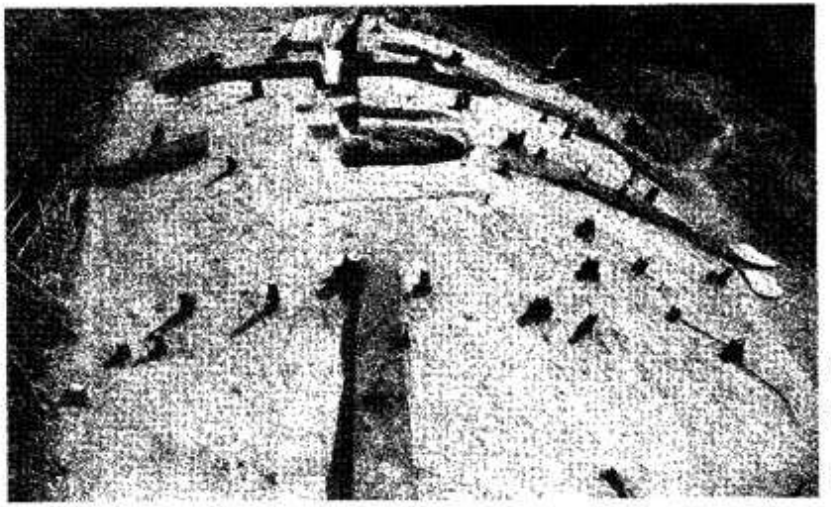
1．広岡49号墳箱式石棺検出状況（南西から）



2．同　蓋石合せ目検出状況（北東から）



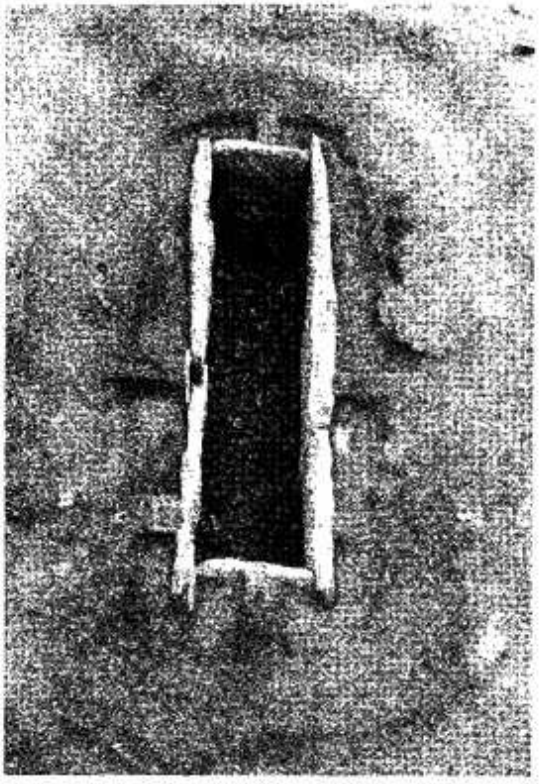
3．同　蓋石、敷石除去後の箱式石棺（北東から）



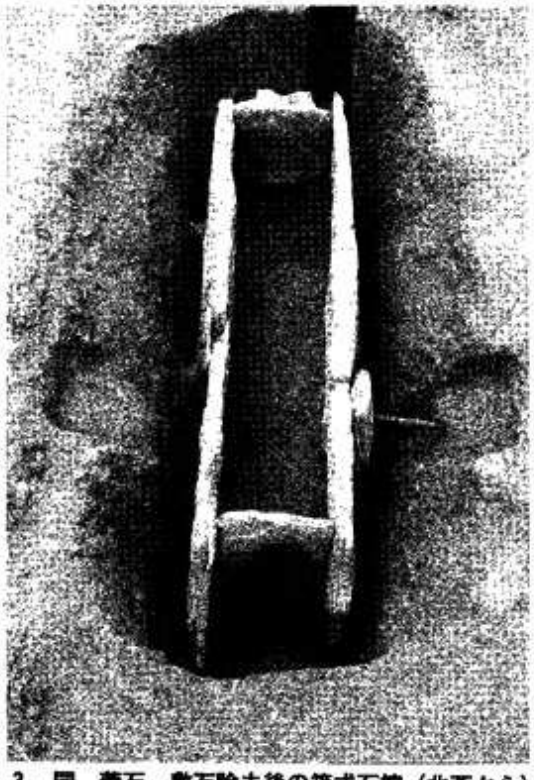
4．同　調査後の墳丘（南西から）

図版 2

1．広岡49号墳箱式石棺検出状況（北西から）



2．同　蓋石除去後の箱式石棺（北西から）



3．同　蓋石、敷石除去後の箱式石棺（北西から）

4．同　墓壙（北西から）

1．調査前の広岡50号墳（北から）

2．同　周溝の堆積状態（南東から）

3．同　調査後の墳丘（東から）

4．同　調査後の墳丘（北から）

図版 4

1．広岡50号墳主体部石材残存状況から（西から）

2．同　墓壙（東から）

3．同　墓壙（北から）

4．広岡49号墳出土管玉

図版 5

鳥取市文化財報告書 21

広岡古墳群発掘調査報告書 II

昭和62年3月5日 印刷
昭和62年3月10日 発行

編集・発行 鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

印刷所 株式会社 矢谷印刷所